

ウィリアム モリス紀行

—コッツウォルド地方とその周辺地域—

齋藤 公江

大学町オックスフォード

モリスの郷への入り口

蜜色のコッツウォルド石灰岩で建てられたどっしりとした建物がつづく中世からの大学町にもいまや変革が訪れているのだろうか。オックスフォードの駅前には黄色のレンガの壁面で、緑色の長い錘形の屋根をした近代建築がこの大学のビジネス部門として完成してからもうだいぶ経つ。サイド・ビジネス・スクールとして、シリア人の資本家、サイド氏の寄付により設立された部門であるが、かつてこの駅前には何ものもなかった。町の中心、シティー・センターからかなり離れた所に鉄道を走らせるのが英国の原則であったからどの駅前もがらんとした侘しいのが当たり前だった。だからはじめてこの駅に降り立ったときには、これがあの有名な大学町の駅なのだと言い聞かせてもなにか侘しい感慨を拭えなかったことをいまも忘れはしない。だが町の中心へと一歩足を踏み入ると、町には雑然とした活気があった。長距離バスのターミナルであるグロスター・グリーンのコーチ・ステーションも常設市場のカバード・マーケットも昔の賑わいをそのままに、だが建物や店の雰囲気などはすべて新しくなっていた。ショッピング・アーケードも増えた。観光客や買い物の人々でごった返すコーンマーケット・ストリートとハイ・ストリートの交差点付近、カーファックスでは人ごみの中を大きなバスが縫うように通り抜けて行き、その賑やかさも相変わらずだ。見るからに貧しそうな人、酒ビンを抱えてふらふらしている人、はひふへほのh音がまったく抜けてしまっているひどい

コクニー訛のような人も数としては大幅に減ったが犬をつれて道で物乞いをする者は相変わらず多い。大方は若者だ。最初は自転車店から出発したという自動車王 W. R. モリスの自動車会社もなんとか存続していて、何世紀も前から現在まで知識人層と工場労働者などが混じりあった町であることにはいまも変わりがない。その点が純粹に大学だけの町であるケンブリッジとの大きな違いであるという。だが一歩通りの雑踏を避けてどこかのコレッジの門を入ると四角い中庭の芝の緑とそれを取り巻く回廊、そして素朴な石の床とどっしりとした柱と天井などの空間に漲る静寂はかつてもそしてこれからも変わることが無いように思える。

新しいミレニアムに入ってから異常気象のためであろうか、ヨーロッパ中がひどい洪水に見舞われている。ここも例外ではない。2003年が明けた或る日モードリン橋の上に立って見回してみたら、眼下は一面の水だった。葉を落とした木々の間からモードリン・コレッジの庭とユニバーシティー・パーク、さらにその橋下



絵・澤 智子

の緑の河岸がひとつに繋がり広大な湖となっていた。後ろを振り向くとそこもセント・ヒルダス・コレッジの庭と植物園、さらにクライスト・チャーチ・コレッジのメドーが水に覆われて巨大な湖と化していた。いつもならば橋の下に一面に広がるやさしい緑の空間と水の流れが白いモードリン橋の優美な流れるような線とひとつになって、川の流れる大学町の風情を楽しませてくれるのだが今年は無残な眺めだった。

現代人にとっては優美に思えるモードリン橋なのだが、モリスの時代に新しくなったようだ。橋幅を広げることに対して古建築物保存協会を設立したモリスたちはジョン・ラスキンをはじめそうそうたるメンバーの名を連ねて反対したのだが、市当局に聞き入れられなかった。オックスフォードの正面玄関とモリスはこの橋を呼んだ。ヴェネチアのサン・マルコ聖堂をはじめおかしな修復から数多くの建造物を守ろうとしたが、この橋は守れなかった。以前の橋はどんなであったのだろうか。モリスたちの反対運動は1881年のことだったが、1890年にスピーカー誌の編集者にむけてモリスはこんなふうにした。

三十年前のオックスフォードはヨーロッパで一番うつくしい都市のひとつでしたし、イングランドではもっともうつくしい町でした。このうつくしさは教育の重要性に由来しているということをオックスフォード以外の人々も否定しはしないでしょう。

モリスのこんな言葉からさらに百十年以上が経ったがオックスフォードはいまも「才能の場という目に見えるものの具体化」としての教育の場であり続けているのだからやはりうつくしい場所だ。

ブロード・ストリートにはトリニティーとベリオールのふたつの名門コレッジが並んでいて、その真向かいの路地を入るとモリスのエクセター・コレッジの正門がある。トリニティーやベリオールほどきらびやか

ではないが、同じく歴史の古い名門コレッジで、とりわけチャペルのうつくしさではよく知られた大学だ。モリスとバーン＝ジョウンズはこの名誉教授に任ぜられている。モリスの肩書きはデザイナーだ。タペストリー「東方の三博士の礼拝」や「鳥」などの他、モリス愛用のめがねやパイプなどを展示しているモリスの部屋もある。

クリストファー・レンの設計による大学の式典などが行なわれるシェルドニアン・シアターの前を通り、ボードリアン・ライブラリーの前に立つとすぐ斜め向かいにパブ、キングズ・アームズがある。図書館の向かいで便利なところに位置しているというだけでなく、中が幾つもの小部屋に分かれていて騒々しい音楽も無く会話を楽しむことが出来るという理由で学生にはどの時代にも一番好まれてきたパブであるがモリスも例外ではなかった。町なかで人と約束するときにはいつもこのパブを指定していたし、宿泊もした。

このキングズ・アームズの脇の道がホリーウェル・ストリートであって、ニュー・コレッジのある通りなのだが、モリスの妻ジェインの生まれ育った通りでもある。モリスはとくにこの界隈が好きであったようだ。教育の場としての大学の存在とは別にこの界隈の長い歴史をひめた建物が好きであったらしい。「ホリーウェル・ストリートにはこの町の最も古い建築物が残っていて、この通りは一番楽しい通りだ。」という。ニュー・コレッジという名が付いてはいるもののもっとも古いコレッジの中のひとつが道に沿って堂々と広がっていて、細い道のその真向かいには小さな民家が連なっている、そういった意味では面白い界隈だ。ホリーウェル・ミュージック・ホールや大学関係のどっしりした建物が他にも無いわけではないが、一瞥しただけでは庶民的な雰囲気漂う通りで、そういった民家とニュー・コレッジの堂々とした建物とのコントラストはなんとも言い難い。モリスが好きだったのは民家の

方で、ニュー・コレッジは「気味の悪い醜い建物」と評している。折角の楽しさをぶち壊してしまった建物とでも言いたいのだろう。ともかくその民家のうちの一ひとつが、今では「えだまめ」という家庭料理をだすすこじんまりとした日本料理の店になっていて、学期期間中には行列ができるほどであるというから、なんとも時代は変わってさらに庶民的となったというか、モリスがこのことを知ったらなんと言うか非常に興味深いものがある。

聞くところによると、この通りは市壁の回りに廻らしてあった堀を埋め立ててできた通りだという。それまで堀に沿って建てられていた民家は掘り側が裏庭となっていたらしいが、その部分に建物が建て増しされ、入り口が通りに面するようになったという。古い部分の建物は中世につくられ、そのまま大きな改装をまねがれてきた部屋が今でも見られるというのだから、まさにモリスがこの界隈を一番楽しいところと呼ぶのも肯けることだ。通りの名前もまたモリス好みではないだろうか。かつての市壁の一部がいまでも残っている。

細い通りを引き返してまたキングズ・アームズの横に出た。日暮れに向かう太陽が堂々とした姿を競ってブロード・ストノートの両脇に並ぶ建物をさらになめらかな蜜色に染め上げていた。人の数はまばらで通りはひっそりとし、壮大な建物は建物そのものがもつ本来のうつくしい姿をとり戻して、ゆったりとした、その名のとうりの通りと共に威厳にみちた静かなうつくしい光景をくり広げていた。細い通りをでた瞬間に目のまえがいきなりパノラマ状に広がったという感じだ。ポートリアンやシェルドニアンの巨大な建物が眼前に飛び込んで来たのだったが威圧感はない。こんな光景展開の楽しみがあったのだ。左手のキャット・ストリートには図書館の一部である円形ドームの建物、カメラがラドクリフ・スクエアを隔てて本館につづき、そしてすぐ後ろには大学の教会としての

セント・メアリー教会が並んでいる。右手を見ると通りの並木がどこまでも続いているかのように見えるパークス・ロードが伸び広がっている。ブロード・ストリートはうねった通りで、いきなり道の端が見えるわけではないのに細いホリーウェル・ストリートからでてきた瞬間のあのパノラマ感は一ドーム形や円錐の柱をもつ建物が視界を狭めずに道と共に流れているからなのだろうか。すこし前方に歩くと道の端まで見えて、本屋、ブラックウェルズの店が道の両側に何軒も並び、その突き当たりにデボナムズの店が見えた。店の前ではいくつも灯されたオレンジの明かりが陰になった黒い部分を照らしていて、そのオレンジ色のライトの色合いも昔のままだ。建物は建て直されたというが、ファサードはそのままなのでなにかが変わったようには見えない。威厳にみちた石の建物が醸し出す絶対の静寂は永遠に変わりようがないようだ。

古いという意味ではアングロ＝サクソン・タワーと呼ばれるノース・ゲイトにある1040年建立の塔が一番古い。現在では市の教会のひとつ、聖マイケル教会に付属しているのだが、この塔の中にモリスとジェインの結婚証明書が保管され一般に展示されている。モリスが結婚式をあげたのがこの教会なのだ。労働者階級のジェインの家族や関係者は一人も参列を許されなかった寂しい結婚式だったと言わざるを得ないのだが、この国の階級意識は相変わらず強く、階級をこえての結婚はいまでも大なり小なり状況は同じであることを考えると新世紀を迎えたとはいえまだまだ英国社会がたどらなければならない道のりは長そうだ。社会主義者として、また詩人、物語作者およびデザイナーとしてアーツ・アンド・クラフツ運動を指導してきたモリスの思想の原点はこの結婚式にもあったと言うことだろう。ラファエル前派は階級性を否定することを兄弟団結成のときから掲げてきたので、モリスがそのような結婚式を挙げざるを得ないことになったのも当然の帰結だった。

ボードリアンの脇を折れ、「嘆きの橋」を左手に見ながらカメラを通りこし、オックスフォード大学の教会であるセント・メアリーの横の細い路地を出るとそこはハイ・ストリートだ。それを左に折れて、モードリン橋の手前の植物園の脇の道を行くとクライスト・チャーチ・コレッジのメドーに出る。大学の敷地をつづれに流れる川をみながら、ルイス・キャロルがアリスたちを連れてボートに乗り込んだのはどの辺りなのだろうかと想いを馳せてみる。町の一番の繁華街に近い辺りにこんなにも静かにゆったりと川が流れているなんて。一面にひろがる緑の牧草地には乳牛が草を食んでいる。教師も学生も寝食を共にするコレッジという教育形態のなかで中世から神学の中心地として発達してきた大学は、その原初においてそれぞれが大なり小なり自給自足の共同体であった筈だ。祈りながら学問を追及し、祈りながら畑を耕した者もあったであろう。アーツ・アンド・クラフツ運動の推進者として、また社会主義者として全ての人により良い生活の実現をめざすように鼓舞したモリスが、修道院設立構想をいдаいてこの大学に入ってきたというのも長い大学の歴史からしてとても当たり前なことだったのだと確認できる光景がいまでも目の前に広がっている。寝食を共にしながら学問を追及することがコレッジという教育形態の中心にある訳だから、日本の大学からはなかなか理解しづらいことなのかも知れないが食堂を兼ねた大ホールが大きな意味を持つてくる。自動車王の方の W. R. モリスはナフィールド・コレッジを設立した。1937年に礎石が置かれたが、完成したのは1962年であるという。さらにホールでの最初の食事は1958年6月6日として大学紹介に書いてある。寝食を共にしてはじめて意義を持つてくる大学形態は20世紀になっても変わることがなかった。ではサイド・ビジネス・スクールは、とすこし気になるころだ。13世紀に一番古いコレッジとしてベリオールやマートンが設立されてから長い年月が経った。しかしまだオックスフォード大学のコレッジは増え続けている。

クリストファー・レンのトム・タワーでもよく知られたクライスト・チャーチ・コレッジはアングロ＝サクソン時代の初期キリスト教の聖人フレデスワイズを祭っていた場所にクライスト・チャーチ・コレッジの礼拝堂を建て、コレッジの基礎としたということだが、そこはイングランドでもっとも小さなカテドラルである。しかし実に美しい聖堂だ。荘厳なパイプオルガン。精緻な彫刻の施された木の椅子。陽の光を受けて一日の内でも刻々と変化する深い色合いの中世のステンド・ガラス。十九世紀の好みを反映したモリス商会によって納められたバーン＝ジョウンズのステンド・ガラス。中世から現代までおおくの時間が過ぎ去った。神学を学びに世界中から人々があつまる時代も過ぎていった。しかしそんな中でもその時々、熟練した者たちの手はうつくしいものを生みだしてきた。そしていまもその生みだされたいのちを精一杯に生きている。モリスが中世を好んだのはその時代、とくに十四世紀に手仕事の熟練した技をもつ者たちが多く現れたからに過ぎない。社会主義者として、また芸術家として十九世紀の「大衆」という呼称のなかに十羽ひとからげに束ねられてしまっている職人たちを鼓舞し、中世の職人たちのように仕事を楽しみつ、うつくしい手の技を取りもどすようにとモリスは労働者たちに語り続け、彼らのためのクラスでも教鞭をとつてきた。プライドをもてる生活をめざすようにと民衆をさとし続けてきたモリスが自ら手本を示したもののひとつがこのステンド・ガラスなのだ。僧侶となって一生を「役に立つもの」のために捧げるといふ大学生活の出発点で選んだ修道院設立構想は、形こそ違つてもその根底に流れる思想を違えることなく異なつた形となつていまここにある。そんなモリスの想いがくつきりとあらわれている窓辺だ。ガラスをとおして射しこむ光はかぎりなくやわらかだつた。

クライスト・チャーチ・コレッジが修道院から大學へとなる前は尼僧院だつたというから面白い。女人の

聖人フリデスワイズを描いたものをはじめとして、バーン＝ジョウンズのステンド・ガラスがここには五枚もはめ込まれている。アングロ＝サクソンの王の娘として生まれたフリデスワイズは結婚を拒み、王子アルガーによって殺害された。その結果ここに彼女は祀られ、ついで尼僧院となった。その伝記にバーン＝ジョウンズは夢中になり、ラテン語の資料を研究してステンド・ガラスを描いたというが、いかにもモリスやバーン＝ジョウンズの好みそうな話だ。またここにはアングロ＝サクソン以前のケルトの信仰で、口から緑の葉を吐き出している「グリーン・マン」の彫刻が椅子の端にあり、異教時代の名残を排除していない。モリスの好きなバーフォード教会のケルトの三女神の彫り物と並んでこの司教座はモリスたちにとって実に面白かったに違いない。

聖堂を出て、また元の道に戻りメドーを抜け白鳥やあひろの遊ぶちいさな川辺をあとにしてハイ・ストリートに戻った。モードリン・コレッジのチャペルから回廊を抜けて川岸にでるとまだ葉をつけない木々のしたに水仙とクロッカスが一面に咲き乱れていた。春の陽ざしにしては強すぎるような光があたり一面に拡散していた。空は夏の空のように青々として白い雲がうかんでいた。冬の日に一面水に覆われた大地からはさらに力づく、くっきりとした色合いの草や花々が萌え出しているようだった。満開のさくらのような木が一本。ブルーナスか。その脇の細く高い木はいま芽吹いたばかりというようなやわらかな赤い小さな葉を、天にむけたその枝先いっぱいひろげていた。そして空のその一角に春の陽のひかりが束ねられ、季節はやがてまた夏へと向かいますよ、と人々を祝福しているかのようでもあった。萌えだしたひかりを後にしてちいさな流れに沿って歩いた。真っ直ぐに行けばユニバーシティ・パークに出られる筈なのだ。だが公園に抜ける橋が見当たらない。取り外されてしまったらしい。やむをえず川辺の道を引返したが、足下の土のや

さしい感触にいつまでも歩いていたい気持ちだった。

「カッコーが鳴き鐘の音がひとつにより集うオックスフォード」と詩人 G. M.ホプキンスがオックスフォードの町をそんなふうと呼んだが、町なかではもうあまり鐘の音を耳にすることはできない。だがコレッジの中の静寂に身を委ねているといくつもの鐘の音が響きあってひとつに集うことはなくなったものの、たまには遠くの鐘の音もやわらかな風にのっていまでも響いてくる。中世の建学精神が完全に失せたわけではない。

町の中心から二本並行するように通っている道路、ウッドストック通りとバンバリー通りがあるがその一方のウッドストック通りを北に上がり、ラウンド・アバウトをすぐ左に折れるとウルヴァーコットの村に出る。ゴッドストウの石橋の上に立つと眼下に一面の緑が広がる。ポート・メドーだ。もう少し歩くとパブ、トラウト・インがあり、石橋を渡ると廃墟の尼僧院跡が広い河岸に立っている。この辺りがモリスの郷、灰色の村の入り口になる。「ユートピア便り」にはドーチェスターの教会を過ぎ、アビンドンからメドレーの水門を越えるとそこが灰色の村のはじまりだ、とある。もうメドレーの水門はないので、現在ではオズニーの水門ということになるが、テムズ川沿いのコッツウォールド・ストーンでできた最初の灰色の村はエンシャムになるのだろうか。ともかくこの辺りがモリスの郷のはじまりなのだ。

「ユートピア便り」のなかでモリスの分身、ゲスト氏は船を降りてゴッドストウの尼僧院跡がそのままあるかどうか確かめる。相変わらず鴨が無数にいることも確認する。

「ウルヴァーコットの上に赤い月がでてきた。私たちはいまや石の郷にやって来たのです。そこでは家はみな、壁も屋根も灰色の石で建てなければならない。さもないと景観を壊してしまうからです。」

蜜色の大学の建物は当初コッツウォルドから切り出した石で建てはじめられたが、やがて大量の石が確保出来なくなるとドーヴァーを越え、フランスのノルマンディー地方から運んできたという。現在もまだ石切り場は存在し、石の生産は細々と続いているが、大量に石を切り取った跡は湖のように巨大な水溜りとなって大地に傷跡を残しているのだ。モリスはこの無数の水溜りについて何というだろうか。三十年まえオックスフォードの町はうつくしかった、とモリスが言ってからさらに百数十年以上が経ったのだが、相変わらずコレッジの数は増えている。しかし、時は流れ続けている。どこも男女共学となり、女子大学もセント・ヒルダス・コレッジひとつとなった。2003年に学生たちは女子大であり続けることを選んだ。しかしそうなったのはそこで学ぶ女子学生のなかに裕福なイスラム教徒の子女が数多くいるからだ、という見方をする人もいる。だが1950年代から列車という公的な交通手段も断たれ、また最近バスも行かない村が増えたから、モリスの郷はさらに人里はなれ、開発を許さないグリーン・ベルト政策によって、ひっそりと変化をこうむらずに生き続けるのかも知れない。

エイヴェリーの列柱石群

いまさら言うまでもないが日本が木の文化ならばブリテン島はやはり石の文化だ。かつては島全体が木におおわれて森林文化の地であったが、同時に岩山も多く長い時の流れの中で幾多の質のよい石を産出してきてきた。そのなかでもイングランドのコッツウォルドの石がもっともよく知られた石ではあるのだが各地域ごとにそれぞれその地域特有の石があるらしい。スコットランドもウェールズもそういった意味ではなんらイングランドと変わりがない。スコットランドの石の家並みにはモリスの好む素朴な灰色の石の村とはまた多少とも趣の異なる都会的な洗練された美しさがある。世界遺産に登録されているエジンバラの建物や道路をう

ずめる石畳のうつくしさ、さらにエジンバラ郊外どこまでも連なる端正な石の民家。列車が鉄橋をわたりエジンバラに入り、さらに海岸線を進むと窓外の色合いがシルバー・グレイにかわってレンガの赤は色を消す。また内陸部を走ると、目の前の光景は山がちになり、ところどころ赤紫色のヒースにおおわれていたり、岩肌をさらけだした岩山であったりする。

湖水地方もうつくしい色合いの石の建物でよく知られている。とくに緑に赤や黄がすこし混じっているような色であったり、光沢のある黒にちかような色がめだつ。そのせいか町はずこし暗い感じを拭えないが、湖の辺に佇む町にはよく似合う色合いだ。牧草地や畑もこの辺りまでくるとようすがぐんと異なってくる。緑の野を仕切る垣根は長縄を流したような黒い石造りで、コッツウォルドの民家の塀と同じく薄く長方形に切った石をコンクリートを使わずに積み上げて行くドライ・ストーン・ウォールという伝統的なつくり方だ。それが広大な田野にうねうねと一面に伸び広がっている光景がこの辺り特有の景色であるようだ。こういった石の垣根はウェールズやスコットランドではよくみかけられるが、イングランドの他の地域ではあまりない。バースには少しあったかも知れない。ウェールズやスコットランドでは石をふんだんに使えるほど人間の数がそれだけ少ないか、石の量がそれだけ豊富であるのだろう。いまでも湖水地方ではダイナマイトを仕掛けて石を切り出している。

そういった訳でブリテン島は実に石の文化だ。イングランドのコーンウォール地方には堅穴式のような建物が無数にある鉄器時代の石の村があり、村全体がなにもかも石で出来ている。さらに人間が石に変えられた話は民話のふるさとコーンウォールやウェールズには無数にある。真夜中に月明かりのなかでダンスをしていた娘たちが石に変えられたと伝説にある。夜中まで遊びほうけることを戒めるためのキリスト教の教え

が生み出した話で、すでにそこに並べられていた石をキリスト教化された人間たちがその土地に内在する迷信の伝統を引きずりながら良い戒めの見本として作り上げた話であろう。或いは戦場で兵士たちが突然石に変えられたという話も多い。コッツウォルドの村のひとつチップング・ノートンの百人の兵士の石は数えるたびに数が変わっていて数えられないという。

そんな不思議な石の話で一番有名なのはいうまでもなくソールズベリー平原に立つストーンヘンジであろう。ケルトの祭司ドルイド僧たちがいまでも6月の夏至の日にはその巨大な石のもとで真夏の祭りごとをおこなうというが、そんな関係でストーンヘンジは長い間ケルト人起源と思われていた。現在ではケルトよりずっと以前の、おそらく新石器時代の人間たちがつくったものであろうといわれている。しかし石がどこから運ばれて来たのかということを除いては、それがどのような目的で、またどんなふうにしてつくられたかなどすべて推論の域を出ないようだ。エイヴェリーは遺跡の規模においてはソールズベリーを凌ぐらしいが、ここも同じようになぜこのような巨大な石が並べられているのかわからず、大まかな年代が推測されているに過ぎない。

ともかくモリスが幼い頃に感銘を受けたエイヴェリーを見に行く事にした。ソールズベリー平原に立つストーンヘンジの石群を見に行くのとまったく同じように、対向車もまれな丘陵地帯を車は走り続け、不思議な人工の丘シルベリー・ヒルをとおり越し、ようやく



絵・澤智子

辿り着いたところにはそれらしきものはなにも見えないただ一面の野っ原だった。その日は暑い日でアイスクリームを売る小さな車が一台緑の中に彩りを添えていた。その先に人影があり、ナショナル・トラストのパンフレット等をおいた小さな場所が設けられているのがようやく分った。入場料は要らないというので挨拶だけして木の柵のなかに入り、さらに細い道を進んで行くと道が開けて左手に巨石が点在しているのが分った。ソールズベリーのストーンヘンジは巨大な二柱の石の上にさらに同じような石を平らにのせた構造になっていて、そういった石の組み合わせが幾つも集まってまるい円を描いて並んでいるという造形的なものだが、ここはストーン・サークルといっても広大な平原に円形にはなっているらしいが、ただ石が点在しているというだけにしか見えないものだ。チップング・ノートンの石も確かにストーン・サークルの名にふさわしくまるくこじんまりと並んでいる。コーンウォールで見た踊る娘たちの石もたしかサークルになっていた。しかしここはようすが違う。ただぼつぼつと立っただけであるような印象さえ与える。だが広いなあというため息のするような感慨を拭えない場所であることには変わりなく独立した大小の石が間隔をあけて散らばっている。そこで石から石へとその脇をとおり抜けて歩いてみた。大きな石はソールズベリーの石と同じくとても重く重量感があり、巨大だ。1849年4月、モルバラー校の生徒であった時にモリスはここに学校から連れてこられ、非常に興味をもった。その時の印象を姉エマに書き送っている。

エイヴェリーという所を訪れました。そこにはドルイドのような円形列石とローマ時代の塹壕があり、その両方が町を取り巻いています。石ははじめからそんな形だったそうです。円形の大きな列石がまずあって、つぎにすこし小さいのが内側にあり、真ん中に祭壇用の石があって、すごく沢山の石です。ほんとうに沢山の石が取り去られてしまっているので、火曜日の朝には分らなかったのだけれども、こういうことが分ったのでもう一度行ってみようと思いま

うした。そこで行ってみると、どんなふうに石が並べられたのか分かりました。僕がみた一番大きな石は高さ16フィート、厚み10フィート、幅12フィートで塹壕も含めて全部で約2分の1マイルです。」

モリスの鋭い歴史感覚が育まれたのはここを訪れたことがきっかけとなったといわれているが、この描写からするとソウルズベリーのようにかなり厳密な、石の輪の中にさらにもうひとつ輪を措いて石が並べられていたように聞こえる。しかし、はじめは分らなかったのだけれども、とあるように二重の円形列石群とはその場に立って見ただけでは分らない。入り口で買ったパンフレットを見ると4500年前の復元図が描かれていて、それには確かにそれぞれ独立したふたつの大きな円形の石の輪が見える。そのひとつの中央には少年モリスが語っている祭壇用の石らしきものが見える。またもうひとつの輪のなかにはさらに輪になっていて、確かに二重の円形列石群が見られる。しかし少年モリスがいうドルイドのような、と言う表現はだれか説明者の言葉をそのまま使ったものではないかと思う。というのも18世紀のはじめにウィリアム・スタックリーによってドルイドの聖所と宣伝されてからずっとそのような見方が定着していたらしいので。1879年にここを再訪したモリスはなにひとつ本当のことは分っていない、と書いているが、本格的な考古学の調査が行なわれ、ケルトとは関係の無い新石器時代の遺跡ということが分ったのは1908年であった。さらに今のこのような形に復元が完成されたのは1939年のことだった。

ソウルズベリーとは異なって大変面白い点は、少年モリスの手紙にもあるように遺跡全体が濠に囲まれている、しかもその中心に町があるという点だ。町にはアングロ=サクソン時代に教会も建てられ、さらに中世、12世紀にその教会はベネディクト派の立派な教会に建て替えられ、異教の地が完全にキリスト教化された。その結果石は悪魔と見たてられ、地下に埋葬されたという。少年モリスが訪れた時はそのような状態が

続いていた頃であるから、多くの石が取り去られてしまっているの、火曜日の朝にはよく分らなかった、というのも事実であった。また、地下に埋められただけでなく、石を掘り出して自分の家を建てるために持ち去った者も多かったらしい。木の文化では考えられないことだ。ウェールズのティンターン・アビーを見に行ったとき、宿泊したB&Bの主人がこの家は崩されたアビーの石を持ってきて建てたのです、と話してくれたが文化の違いをつくづく考えさせられた。後世にいつまでも残る石の建造物は設計の発想の原点から異なっていて、このブリテン島では工場であっても有名なデザイナーによる立派な建物を建てる傾向があるようだ。そのよい例がテイト・モダンとなったかつての火力発電所であろうし、また住宅へと改装されたチップング・ノートンの高い煙突が真ん中に聳えるみごとな建物であろう。かつては織物工場で野原のただ中にたった一軒、ドーム型の流れるような屋根の線を浮かび上がらせてどっしりと建っている。

ブリテン島中いたる所に歴史が溢れているがとりわけこの辺りは歴史の宝庫だ。ケルムスコットはオックスフォードシャーであり、50年代まで鉄道があったレッチレイドはグロスターシャー、さらにレッチレイド教会の裏手の橋を渡るとそこはもうウィルトシャーで三つの州が密接している所であるから歴史も複雑に絡まっている。川舟による輸送に適したテムズ川を媒介として人間も物品も烈しく行きかった結果、それだけ歴史も重層みをましている。太古の歴史を秘めるウィルトシャー。グロスターシャーにはモリスが大きな興味を抱いたチェドワース・ローマンヴィラというローマ時代の遺跡があってその時代のものとしては最も大きな規模である。モリスがストーンヘンジを訪れたのは1879年8月であったが、ソウルズベリーのストーンヘンジを見たのはそれが初めてだという。その年モリスはソウルズベリーからモルバラ、さらにエイヴェリーへと廻った。とくにストーンヘンジには感銘を受けたようだ。大地と空がひとつに合わさるほど雨

が降り続いたがなにひとつその広大な平原と不思議な遺物を損なうものはなかったと言う。人類の手による最古の、しかもとてつもなくエネルギーに満ちたソウルズベリーやエイヴェリーの石の建造物、豊穡と死への勝利を描いた白馬の谷、又その近辺での祖国を守るためのアルフレッドと兵士たちのアッシュダウンの戦いなどモリスが好きな深い歴史を秘めた広大な大地がこの辺りには密集して、しかも延々と続いているのでモリスは飽くことなくこの地を廻り歩いた。

帰り道モリスの母校モルバラ一校に寄ってみた。立派な門構えの赤レンガの建物だ。現在ではいかにも裕福そうではあるが歴史を感じさせない建物だ。この学校から得たものはなにもないとモリスは言い切っているが、なるほど、そうかも知れない。ブルジョア教育などに信を置かず、「ユートピア便り」にあるように「森のがっこう」のほうがモリスにはずっと好ましかったのは言うまでもない。もしモリスに堅固な大地への信頼がなかったならば私生活においても仕事においても、ましてや社会活動においても幾多の試練を乗り切ることはできなかったはずだ。地上のすべてが脆く移ろいやすいものであっても、大地はその堅固な姿を崩すことは無い。

癒し主にして守り主なる大地

判然としない時に向かって
そんなにも速く時は移ろってゆく
さようなら 愛してはくれない私の愛しい人よ
さようなら 愛された愛しい君よ。

なんだった 僕たちのところは喜んではいないって
すべきことは何かないのか
怖れはみな消え去って
春が新しい花を咲かせはしなかったのか。

船の帆が僕たちの上で膨らんで
波打つ海が竜骨を押し上げている
僕たちを慈しんでくださる方が 癒しの賜ものをたずさえて
呼んでくださったのだから。

勝利した者には冠を
敗者には臥所を
消え去ってしまうことはない物語のなかで
栄光が輝きはじめている。

苦しみは終わり
喜びにふるえる手が剣を振りしめるいま
繕い直された君のいのちに目をやって
ふさわしい報いを施したまえ。

感謝を捧げられなかった朝
昼に頂いても用いなかったもの
あざ笑われた夕べ時
拒まれた祈りの夜を思うのだ。

それだけではなく それより前のいのちを
君はなにも覚えてはいないのか
思い込みの地獄からうまれた恐怖が
どれだけ僕たちのいのちを揺るがしたと思うのか。

やがてこのあとにやって来るもの
君はどんなふう生き 虚しい笑いや
つれない振るまいに
どうやって直面しようというのか。

恐怖のなかで君は願った
こころ安らかなときに君は悔やんだ
こころの炎を虚しく燃やしたことを
こころの網が纏れていることを。

愛がおとずれてうるわしい挨拶をかわし
愛は去ったが 恥ずべきことはなにもなかった。
朝と夕べのうす暮れがひとつになるのを
夏の太陽は責めるだろうか。

なんだった 暗い夜の空しい風のように
愛が訪れても去っていったのは
君の愚さがはかり知れない収穫の
種を蒔いたからだというのか。

君は悲しみで愛を殺してしまったのか
君の涙は太陽を消し去ってしまったのか
そうだとすると 明日は
おおくのおこないがとられるだろう。

君が船で渡ったこのうす暮れの海は
莫として やがて真っ暗になったが
それは君がしくじって
君の物語が消えてしまったからなのか。

落ちついたまえ 君のかつての苦しみは
慈しみにみちた大地から生まれ
君が残してゆく悲しい物語も
大地は忘れはしない。

さあ 安らかに 君が横たわって掴む
変わることはない喜びがあるのだから
こういったことが昔のことになるまで
大地は守ってくれるのだから。

君の魂といのちは消えてなくなり
君の名は夕べの風のように消えてしまう
だが大地は君がきょうとる
おこないを慈しんでくれるだろう。

やがて君の喜びと悲しみのすべては
つい昨日までは耐えきれなかったものが
明日は軽いものとなって
無駄になることはない。

ほら 見てごらん かなたで暁がまばたきをして
日の出がちかづいてきている
人は死すべきものなのかと
問うことを忘れてしまう。

だから昼間の光と楽しい笑いのなかを
歩いていった人たちのおこないをたたえよう
大地のうえに生きる者たちの物語が
終わりになることは決してないのだから。

ブロードウェイ

鉄道でイーブシャムまで行き、バスでブロードウェイの村に入る。コッツウオールドの北の端で、バーフォードがコッツウオールドへの南の入り口ならばブロードウェイは北の入り口と言われる小さな村だが、バーフォードと並んでいまではしゃれたブティックなどが多くある瀟洒な村だ。メイン・ストリートの両脇にはど

っしりとした建物が並び、コッツウオールドの村にふさわしく建物はみなコッツウオールドの石で建てられているのだが、蜜色の濃い石だ。モリスの好きな灰色の村と言う表現とは同じコッツウオールドではあっても大分ことなる。この村に入っていくとそこは黄金郷とでも呼びたいような蜜色が輝いているような村だ。年月が経てば蜜色が灰色に変わって行くはずなのだが、灰色に変色しないように絶えず定期的に石の表面を手入れしているのか、それとも同じコッツウオールドと言ってもあまり変色しないほうなのか定かではない。ブリテン島の土の色は地方によりびっくりするくらい異なっている。ドーバー海峡からケントー帯やワイト島に見られるような石灰岩の真っ白な地層は良く知られているが、コーンウォール地方へ行ったとき海岸線を走る列車の中から見える断崖は真っ赤であったのに驚いた記憶がある。しかしケント方面に拘わらず白亜の地層の地域は他にもある。モリスの好きなバークシャーの白馬の谷も石灰岩であるからこそ草を削って真っ白な白馬を地上絵として出現させられるのだが、ここウスターシャーのブロードウェイはおなじコッツウオールドのなかでも真っ黄色なのだから土の色ひとつ取り上げても実に多様なことが分る。

コッツウオールド最北端の村ブロードウェイは土の色だけではなくなにかほかのコッツウオールドの村と異なるものがある。なんだろう。言葉ではない。だがやはり人から感じるなにかなのだ。その違いは湖水地方やノーサンバーランドで感じたなにかだ。福音書で有名な聖なる島、リンデスファーンに行くためにベリック・オン・トウイードに滞在したことがあるが、そこでもなにかが違うと感じた。莫としたものではあったがその違いは同じく人から受ける印象の違いだった。国境ということもあり、人種が違うのではと思いついた。スコットランドに隣接するノーサンバーランドの人口構成はイングランドとスコットランドが半々くらいかな、という答えが返って

きた。サッカーの試合を見に行ったらすぐ分るよ、という分りやすい返事に納得もした。湖水地方でも事情は全くおなじだと同じく地元の人から聞いた。ブロードウェイはウェールズに近いわけだからウェールズ人が多く働いているのだろうと思い、尋ねてみるとやはりそのとおりであった。当たり前といえば当たり前ののだが漠とした謎はようやく解けた。

村の中央を広い通りが縫っていて、ウェールズ方面からやって来ると道がこの辺りで急に広がるのでブロードウェイと名が付いたらしい。コッツウオールドの村は次々と大型観光バスの進入を拒否しているので、観光客がバスで訪れることが難しくなっている中で、ここは道幅の広さからであろう、バスの駐車が許可されていて、団体の日本人観光客もおおい場所だ。しかしどの方面から行くかにもよるのだが、コッツウオールドの最北端に位置するこの村は単独の旅行者には他のコッツウオールドの地域同様やはり難しい所であろう。

このブロードウェイはブロードウェイ・タワーとしてビーコン・ヒルの上にぽつんと搭だけがあることでも有名だ。別名「気狂い」タワーとして知られているものだが、本来建物の一部としての搭が本体を持たずに部分が独立してそれのみで存在しているというとても珍しいものである。一八世紀末に六代目のコヴェントリー伯爵がここから一九キロメートル離れた地に住んでいたのだが七八歳の時この搭を建てたという。なぜ搭だけを建てたのかは定かではない。恐らく一八世紀に流行した風景式庭園の作庭術の根底に流れる思想のひとつ「廢墟」につながる「狂気」を生み出そうとして建てたのではないかというのが一番強力な憶測であるらしい。ともかくもゴシック式の狂気のような搭が出来上がったのだ。この丘はコッツウオールドで二番目に高い丘で、ビーコン・ヒルとしてのろしをあげて、合図を送る丘として使われてきた。よく晴れた日にはここからイングランドの十二の州とセヴァン川



絵・澤智子

の谷あい、さらに遠くウェールズの間々などが見えるという。

モリスの親しい友人で数学の教師であったコーメル・プライスがこの搭を借りて一時期住んでいた関係上、モリスやバーン＝ジョウンズ、及びその家族たちが何回か遊びに来てこの搭に宿泊している。彼らにとってこの搭はプライスの愛称、クロムの搭として大変親しまれていた。1876年にモリスはこのように書いた。「風や雲に囲まれて、今日クロム・プライスの搭に来ています。ネッドや子供たちも一緒に、みなとてもはしゃいでいます。」メイもこのように書いた。「しゃがみ込んでいるような小搭の付いた建物で、幾つもの州の素晴らしい眺めが楽しめます。」メイにとってこの地は過ぎ去った昔に想いを馳せる父の姿が思い出される懐かしい場所であり、切々とした情感にみちた文が残されている。

けわしい丘の麓に銀色がかかった灰色の村があり、そのかなたは青い土地でした。何マイルも続く遠くの景色。父がこの丘から見える四つの戦いについて語ってくれたことを思い出します。イーブシヤム、ウスター、トゥークスベリー、そしてエッジィ・ヒル。その話が想像力を掻きたてたと見えて、父は昔を振り返っているようでした。父の目は静かに伸び広がっている土地を眺め回し、その戦乱の過去の光景を思い描いているようでありました。」

父のそばに佇んで心からの愛情と尊敬の念につつまれて父の話を聴き、遠く過ぎ去った思いに浸っている父の心のなかをメイはそっとのぞき込んでいるようだ。この文章を書いているときのメイのこころは父との取り返すことのできない貴重な懐かしい瞬間への想いでいっぱいであったことだろう。子供たちにとってもこの塔は限りなく楽しいものであったらしい。メイの思いではこんなふうにつづく。

「ひどく不便ではあっても、わたしたちのような素朴を愛する人間たちにとってはいままで経験したなかでもっとも楽しい場所でした。わたしたちにはどんなことでも気もちよくできてしまうのですから。搭そのものはたしかに馬鹿げています。お風呂は風が石鹸の泡を吹き飛ばさず、水がたっぷりある日に屋上で入らなければなりません。それに水がどうやって上まで届けられたのか知りませんが、爽やかな香りのよい風が体の疲れを吹き飛ばし、なんと素晴らしかったことでしょう。」

塔は階段を蔽っている円柱のような建物に支えられて、外からは菱形のように見える建物が中央に位置している形になっている。その中央部分の各階には暖炉のついた部屋があり、台所もあって生活できるようになっている。現在ではモリスをはじめアーツ・アンド・クラフツの展示場となっているのだが、六つの窓があり、それぞれ異なる景色がその外に広がっている。塔のてっぺんからは十二の州が見えるということで、それぞれの窓からじっと外を覗いていたら「地上樂園」の冒頭の詩「ことわり」の一節が思い出された。

魔術師がクリスマスの頃 北国の王に
あんなにも珍しいものごとを見せてやったそうだ

ひとつの窓から春がみえ
ほかの窓から夏が萌え立つのがみえ
みつつめの窓からはたわわに実るぶどう棚
だがそのいっほうであの物悲しい十二月のかげが
聞こえはしないのだけれども いつものように
笛の音のような響きをたてていた。

「夢をみるもの 時にかなって生まれた からっぽの唄をうたう歌人」としての「地上樂園」の詩人は春夏秋冬が同時にみえる四つの窓の発想をここから得たのではないかと思えるほど不思議な気持ちにさせられる窓だった。

もう遅い。不思議な気持ちでモリスと娘たち、そして六つの窓の外の遠くの地域のことなどを考えていたら大分時間が過ぎ去ったようだ。帰りのバスがなくなる、と思って急いで丘を降った。羊や牛が他人の領地に侵入しないようにと設けられた踏み段のある木の柵をいくつも越えながら、ときにウサギやモグラの穴に落ちそうになりながら転げるように丘を降って村に戻った。通りの下の方から眺めるとゆったりとしたそのメイン・ストリートは静かにうねりながら向かいの高い丘の斜面をつたい彼方へと途切れて見えなくなっていた。濃い蜜色の建物は硬度をおとした光の中で落ち着いた佇まいを見せていた。

白馬の谷

アングロ＝サクソンの王、アルフレッド大王の生誕の地ウォンテイジから B 級道路 4507 の起伏の激しい丘陵地帯を走って行くときようやく「白馬の谷」という標識が現れた。そこを折れ、さらに丘を登ると左手の丘の中腹に刻まれた動物の姿があらわれた。アッフイントンの白馬だ。丘の中腹の草を削り石灰岩の白い地肌を馬の形に表わしたものだというのが、線描画のようなパターン化されたしなやかなデザインは馬というよりも猫のような趣がある。長い間この馬は本来騎馬民族であったケルト人の馬信仰と結び付けられてケルト起源とされていたのだが、ストンヘンジやエイヴェリーの

列柱石群と同じくもっと古いようだ。またなんのためにこのような地上絵が描かれているのかまだよくは分らないようだが最近の研究ではこの白馬の起源は三千年も遡る青銅器時代のものだそうだ。ほんとうのところは分らないにせよここも歴史の経過の中で死者の埋葬の地であったのは確かだ。白馬の下の流れるように滑り落ちている斜面の脇にイングランドの守護聖人、聖ジョージが竜を退治したという伝説のドラゴン・ヒルがあるところをみると、聖なる白馬が死者の埋葬された塚を見守っているという感慨を拭えない。

さらに丘を登りつめると木の柵の前に出た。その脇にはナショナル・トラストの檜の木マークの立て札が立っていた。車を降り、先ほど見た白馬の方向へと向かった。草いきれのするなかを夏の陽射しを浴びながら急ぐ。広い傾斜地を歩くのはそれ程楽ではない。ようやくドラゴン・ヒルと白馬の両方が見渡せる崖ぶちにてだが、ここでもはっきり白馬の全形を見るのは不可能だった。やはり航空写真以外、あの緑のなかからくっきりと真っ白に浮かび上がるような姿を捉えるのは無理なのだ。

いつもの列車で行きます。ゲッリング夫人には迎えに来てくれるよう、葉書を出しておきました。月曜日まで滞在しますから、その日を白馬の日としたら良いでしょう。

ケルムスコットに滞在中の家族に宛てたものだが、モリスはこの地を先祖の地として定期的に訪れていて、オスカー・ワイルドに言わせるとモリスはケルト人中のケルトであったという。祖父の代からイングランドに移り、モリスもその地で生まれ育ったのではあるが、血は純粋なウェールズ人の血であり、ケルト人特有の自然に対する深い畏怖の念がモリスのなかにはあった。後期のファンタジー作品をみてもわかるように自然に宿る神性は魔術的な性格をおびてモリス作品に表れ

ているが、ファンタジー作品なのだからと軽く流せない。さらに、エッピングの森を友とし、溢れるばかりの自然がモリスの原風景であったのだからという見方も出来るかも知れないが、その点についてもそれだけでは済まない、幾代にもわたる血のなかに深く沈潜したものが感じられる。生まれも育ちも生粋のウェールズ人であるディラン・トーマスを持ち出さないまでも、似たような生い立ちの G. M. ホプキンズもウェールズ人だった。汎神論を疑われるほど自然のなかに宿る神性を詩に表わしたホプキンズの詩のひとつに「ビンゼイのポブラ」というのがあるが、そこでは切り倒される木を見ている詩人のこころの痛みと、斧で打たれ傷をうける木の苦しみが見事に音で表わされている。モリスもホプキンズと大変よく似た感性で自然を取り扱っていて、特にモリスは環境破壊に対してもナショナル・トラスト運動の先駆的役割を果たしたが、そういった行動もそのような血のなかに深く流れている部分から出てきたような強い信念に基づいてであったといえるだろう。ともかく馬はエポナ神としてギリシャの昔から豊穡と死への勝利の象徴であり、騎馬民族ケルト人もそのような信仰に基づいていたのだと思う。

大地を限りなく尊いものと思い、大地をとおして熱烈に生を愛し、民衆のために「明日の変化」を信じた社会主義者ウィリアム・モリスのなかで死と戦う豊穡の神は馬の姿となって民衆を鼓舞する存在となったようだ。パークシャーのこの辺りはモリス作品に数々のインスピレーションを与え続けた所なのだが、アルフレッドが王となる前年、侵入者デーン人との戦いに勝利した場所はこの白馬の谷付近であったと考えられてきた。そこで戦いはアッシュダウンの戦いと呼ばれているものの、モリスの意識の中ではその戦で勇敢に戦った兵士たちはこの辺りの田舎の出身者であった。アルフレッドの誕生の地、ウォンティジから車ですぐのところであるし、芝を定期的に刈って白馬を描き出しているのは現在でも近隣の住民たちであるからそうい

うことにもなろう。「楡の木のでしたで」というエッセイのなかでモリスはこんな風に語っている。

「楡の木のでしたでこういったことに当惑し、わたしの思いはアッシュダウンの野戦から戻ってきて、テムズの谷を永遠に見下ろす白馬を刻んだまさにこの田舎の勇敢な男たちのもとにふたたび戻って行くのです。」

さらに、モリスの意識はアッシュダウンの戦いをこの地域の農民たちの生活の向上のための戦いと結びつけ、安っぽい物質主義との戦いとも重ねる。

「そんな状況のもとであらたな（このたびは資本家による剥奪にたいして）アッシュダウンの戦が行なわれなければならないとするならば、程度においてはムクドリとおなじくらい聡明に、また恐らく同じくらい穏やかに、あらたな白馬が彼らの家庭を見下ろすことでしょう。」

モリスがはじめてロンドンから川舟、「ジィ・アーク」で家族や友人たちと共に川を遡り、ケルムスコットまで行ったとき一番面白かったことは農民たちが麦刈りをする光景をみたことだったという。だが当時の農村は若い働き手が少なく、農民の生活も奴隷状態で、悲惨なものだった。そこでモリスはそういった悲惨な状況を改善する夢を描いた。それが「ユートピア便り」という作品となった。その物語のなかではだれしもが若く小ざっぱりとした手づくりの衣や装身具を身につけ、物語の結末部では豊かな実りに感謝し、昔ながらの大鎌で刈り取った麦の収穫を喜ぶという光景が描かれている。つまりアーツ・アンド・クラフト・ユートピアと呼ばれるモリスの思想の具体化としての物語なのだが、その思想の原点はこの地域の自然の美しさと、それに不釣り合いな貧困から生じる醜い人間社会を悲しんだことがはじまりだった。

イングランドの田舎には緑の美しい自然がまだ残されているのだが、崩壊の手がその上にのせられている。人間

の生活はそこでは貧しく奴隷的であって、住まいと其中で営まれるいのちの確かな印は、かつては健全で小奇麗なものだったが、惨めなできそこないに道をゆずって、見るのも辛く苦しいものとなっている。…

生きていても死んでいるような生中の死としての商業主義の手が田舎にも伸びてきて本来うつくしい筈の自然さえも醜くしようとしているさまを案じて語られた言葉だ。しかし白馬の谷は大地が与えてくれる希望と癒しの力を信じるモリスを励まし、民衆が芸術作品を生み出すことができるように鼓舞した。なぜならばイングランドの装飾デザインの原点がここなのだから。

オックスフォードの町の中心にアッシュモリアン博物館があり、「アルフレッドの宝飾品」が展示されている。外敵からブリテン島を守り、いくつにも分割されていたアングロ＝サクソン王国を統一してはじめての英国王となったアルフレッド大王は力において勇敢であっただけではなく、大変聡明な王でもあった。

幼いときに義母からアングロ＝サクソン詩を贈られて読み、生涯学問を重んじて文武の才に勝れ、自らラテン語の書物の翻訳を行ない各教会に配布するほどの王であった。その王が命じて作らせた、一見ブローチのような飾り物が「アルフレッドの宝飾」である。それは卵形のせり上がった黄金の縁どりのある白、グリーン、ブルーの七宝焼で、人物が描かれている。その縁の部分には透かし細工になっていて、「アルフレッドが私に作らせた」とアングロ＝サクソン語で文字が彫られ、その文字そのものがうつくしい模様となっている。その下にはおなじく黄金で口をまるく開けたイノシシのような動物の顔がついている。何に用いられたのか判然としないらしいが、人物の乳白色の顔と腕、衣服のエメラルド・グリーンなどが金で縁取られ、背景のコバルト・ブルーのなかに浮き上がっている。ひとつひとつの色合いが明快で実にうつくしい。そのアルフレッドの宝飾のちかくにはミンスター・ラヴェルの宝飾が展示されていて、おなじような黄金と七宝焼きの

作品だ。「アルフレッドが私に作らせた」という文字のなかに、作るように命じた王とそれを作った職人の関係が対等にあらわれている。つまり「私」は作品の中に永遠に刻印されているのだ。さらに作り手のプライドと自信が漲っている。ともかくも手仕事のうつくしい飾りがこの辺りで生み出されたという事実ひとつ取り上げてこの白馬の地域をとおしてモリスが芸術を民衆に鼓舞しようとする意義があった。モリスが民衆に求めていたものはロイヤル・アカデミーのようなお抱え芸術家の作り出す作品でもなければ、プライドのないあまりにも大衆化した作品でもない。アルフレッドの宝飾や中世の職人たちの技にみられるような毅然としたプライドのもてる手仕事を労働者たちに取り戻させることがモリスの一番欲したことだった。労働者に向けての1883年の講演、「民衆の芸術」のなかでモリスこんなふうに語っている。

大衆の芸術、あるいは民衆の芸術という言葉にはご存知のようにひとつの意味があります。その言葉が意味していたものは実際に存在していて、あなた方がナショナルギャラリーや大英博物館の中をぶらぶらしている時に少しは見たかもしれませんが、それは多くの場所で、また多くの場合において、苦しみや問題の中にいる人々を慰めたり支えたりしてきました。

そういった芸術が私には偉大な貢献に思えるのです。つまり自分の労働によって生きている者たちが身体全体で知性を用いて作り出したものだからです。それは思慮のある渇をともなった本能的なもので、その人の移動にしたがってどこにでも移動し、その人の変化にしたがっていっしょに変化し、美的感性と人生の神秘を真に表現できるものです。即ち、喜びから生まれた芸術で、悲しみの色合いを残していても、それを乗り越えたものです。巧みな技と熱意が漲っていることを未来に示す生きた証人になるものであって、生活の光や影を縫って、日々の慌しい仕事の中を歩いて行くときに、自信に溢れすぎて自らの不完全な考えや洞察力の微かなきらめきが驚きや恐怖におちいらぬものです。…

今日、悲しい事実は民衆の芸術がないということです。例えば中世の建物がその時代の民衆の感情や渴望を、信徒のものであろうと、執事のものであろうと穏やかに、また素材に表わしてきたように、民衆全般の感情や渴望を表現できる芸術がないのです。

モリスの表現は象徴性が高いので少しまわりくどい箇所もあるが、要するに人生の喜怒哀楽を知った生きたところをもっている人間が、こころを込めて自分を表現したもの、となるであろうか。その人と共に移動し、その人の変化に従って変わる作品、即ちその人的確な自己表現がなされていて、しかも自惚れの技の跡を残さないもの、と解釈できるであろう。

父は笛の音がいちばん好きでした、とメイ・モリスは語る。丘から丘へとこだまする笛、もしそれがバグパイプの響きであれば、それはモリスがいちばん喜ぶ音と空間の世界だという。瞬間を束ねて、余韻だけを残す音の世界。堅固な大地から大地へと漂って、人の意識と精神を高め、鼓舞して止まないもの。風のように去っていても、それを聞いていた者たちを微動だにしない緑の大地とひとつにして、確たる自信をあたえるであろう楽の音。民衆の芸術について語るモリスの言葉にはそんな笛の響きのようなものが感じられる。



絵・澤智子